トイレ。

月葉りんご

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
トイレ。

【Ｎコード】
Ｎ２９３６Ｌ

【作者名】
月葉りんご

【あらすじ】
狭い――。白い――。汚い――。
でおなじみの、用を足す場所――。
トイレ――――。

――――その場所は、何故か落ち着く場所でもある。

しかし――、

俺のうちのトイレは何故か突然――――・・・・・・

・・・・・・・・・。

ジャンルよくわかりませんが、

現代のある普通の男の話です。

三章で完結の短編連載です。

第一章【 声。】

「お前、何悩んどんのや。ま、人生いろいろあるわな……――」

おそらく俺は、驚愕と絶句――それが入り混じった顔をしていたと思う――。

勿論、そんな事ある訳がないと一度耳を疑った。でも、それはすぐに現実の事であると告げられた。続けざまにこんな事が聞こえてきたのだった。

「何をキョロキョロしてますのや。嘘や～思ってるんやろうけど、ほんまもんやで～」

「！」

――確かにそれは、そう言った。

まずその声は何故か関西弁で、歳は結構年配の男性のもの。言ってみれば、おっさんの様で――低く、そして気だるそうである。

今、俺がいる場所――。ここに人はいない。喋るという特殊能力を持った鳥類であるセキセイインコも飼っていない――。

人間の声のするテレビやラジオもない。俺は言っていて吉幾三を思い出した。

少ない可能性ではあるが、誤動作で電話が通話ボタンを押してしまい、携帯電話が声を漏らしていた声とさえも考えられない。

――何故なら俺は、ここに携帯電話は持ち込んでいないのである。

この自分がいる空間というのは狭い個室で、色のイメージでいえば白が一般的。

一般的といえば思いついてくるのは、ここはどちらかというと“汚い”とされる場所であるという特徴であろう。

そして――その用途と言えば、人間が食物を摂取し不要な物を排

出するために入る場所であり、その用を足す以外はあまり足を踏み入れることは掃除くらいであろう――。

そうなのである――。

もうお解かりだろうが、ここは『 トイレ。』以外に思いつくことはないであろう――。

俺は、一人暮らしだから勿論ここには俺一人しか住んでおらず、実態を書いてしまうと自分で悲しくなるほどなので気は進まないのだが書くと、『彼女はいない――。』、『金もない――。』、『友人の来訪さえもない――。』、『おまけに、就職が決まらず悩む』というあまり取りえもないがそれでも必死に生きている善良な一般成人である。

そんな俺のマンションの一室にある、何の変哲もない狭いトイレのこの空間で、では一体、何が自分に話しかけているというのか――。周りを何度見渡しても、ここは俺の住んでいる築２５年という物凄く古く、でも家賃だけは安いという利点しか思いつかない様な、ボロっちいマンションの一室の最も狭い場所――　普通のトイレである。

ペットも飼っていないし、とくに誰か侵入者がいる気配もない。

俺は、『何悩んでるんや？』そう言って来た声の主に、全く心当たる節がないのであった――。

悩んでいるといえば、三十四歳という歳で再就職がなかなか見つからない俺は、面接に行っては落ち、また落ち……。確かに、ここ最近のリーマンショック以来、経済は低迷の一途を辿り、“不況”と言われている今のこのご時勢の中、就職も厳しいものがあり、年齢が年齢なのか、それを身を持って体感し思い知り、落ち込んでいたのだった。

もう就職なんてやめてニートでもしようかなんて、あらぬ考えさえ起こしてしまいそうな状況であった。

しかしながら、そうはいっても俺の悩んでいるその様子を、何故、声の主がそれを知ってるというのか――。

先に述べたサイアクな俺の環境と実態を考えると、監視カメラや盗聴器を設置されているといったドラマや漫画のような可能性は考え難いし、そのように誰かに監視されるような甲斐性もないのだ――。

何故だ――。何故、こいつは俺のことを知っている……。

俺は、そう戸惑う状況の中、あれこれと思案して迷走していた。

すると、声の主は再び俺に話しかけてきた。

「――お前さん、どうせわしが誰かなんてあれこれ考えとるんやろ??」

動揺しながらも平静を装ってという表情の中、冷静に考察を進めていた俺の考えを、“全て見通している。”といった言葉を投げかけられた俺は、つい、かっとなってその声に向かって口を開いたのだった。

「だ、誰だっ！　何故、俺の考えていることがわかる……！　で、出て来いっっ！」

……。

辺りは、しぃーんと静まり返った様に静寂が訪れた。

どうやら返事が返ってくる様子がない――。その狭い空間の隅々――、身体は動けぬまま瞳だけを動かし、蚊一匹見逃さないといっ

た感じであっただろう。気分は事件の犯人が隠れている場所まで辿り着き、敵の動向を気にしつつも、熟練のその目を光らせている刑事の様であった――。

俺は、今ちょっとかっこいいじゃないかと思っていたのだが、トイレの便座に座りながら漫画を太ももの辺りに開き、目を光らせているという間抜けな姿の刑事が、一体どこにいるというのかということに気付いた瞬間、馬鹿馬鹿しくなってきた俺は、ため息を吐いた。

――はは、俺何やってんだ。……俺、疲れてんだな――と、思った瞬間だった。

「あぁ、ごめんごめん。今、漫画に夢中になっとったわ。なんか言ってたな？　で、なんだっけ？」

な……！

……ま、漫画だと――！？

すぐ返事をしなかった声が、また再び俺に話しかけて来たばかりではなく、事もあろうか『漫画を読んでいた』と、確かにその声は言ったというのだから、驚愕せずにはいられなかっただろう――。

俺はこのマンションの一室の中で、誰も一緒に生活している者なんていないので、人の目を気にすることもないのであるが、何故か、この狭い空間だけが唯一プライベートが守られているような空間であった。おかしな話である。しかし、俺にとってトイレというこの狭い空間は、『用を足すためだけに存在しているもの』ではない――。

名づけるとすれば“癒しのプライベートブース”として俺から絶大な信頼を得て、重要なポストに置かれているというこのトイレの中には、漫画といっても見当たるのは俺が今開いている『ヤングマガ人』という男性向け週間漫画雑誌をふとももに乗せているという

こと位しか、思い当たる節はない。
やっと話しかけてやったというのに、そんな意外な返事を返してきた声の一言で、一瞬、間の抜けた空気が流れていた。相手のペースに呑まれている気がした俺は、それを脱するためにも、その正体について冷静に考えてみることにした――。

――そういえば昔、学生時代の友人が学生の頃、小さいおっさんを見たと言い張っていたが、それなのであろうか――――。
あの時、俺は馬鹿にしていたが、本当に存在していて今俺に話しかけているというのであろうか。……いやいや、馬鹿馬鹿しい。俺は時々迷走めいた妄想はするが、こうみえても現実主義者のつもりだ――。
しかし、漫画を読んでいたということは、上から見ていたというのであろうか？
そう思った。
次の瞬間――。上をばっと勢いよく見てみたのだが、古いボロっちいマンションのトイレの換気口に、ほこりがそこに揺れているだけであった。しかも、特に穴は大きくなく、小さくて丸い――。とても人がいる様な場所ではない。天井裏へ？　いやいや、第一どうやってそこに登り、潜んでいるというのか。

――いや、待てよ……？
ひょっとしたら何処かに天井裏に登れる場所があり、誰かが天井裏に隠れて俺の姿を覗いていたという事はないだろうか！
……このトイレで毎日ため息吐いている姿を、その小さな丸い換気口の隙間から覗かれていたという事なのか……！？
色々と分析と思考を巡らせた結果、俺は信頼度は低いが結論に達した。

人間、問題が起きた時にすぐ対処できるかどうかというのは、割

と大切なのではないだろうか。
あれこれ悩んでいるうちに時間だけが過ぎ去ると言う事は、『人生を無駄にすることだ』と、一昨年亡くなった爺ちゃんがよく言っていた。爺ちゃんは、フットワークの軽い人で、様々な趣味を気になればすぐ実行してはすぐやめる事も多かったが、『気になる事があればすぐに行動する』という事を、俺に教えてくれた第一人者でもあった。
『後になって気付いても、遅いのじゃよ。あの時やっておけばよかったなんて思っても遅いんじゃ、博之、色んな事経験して大きくなるんじゃぞ……』と、小学生の時に言われて、あの時は空返事で釣竿を買って貰うために、爺ちゃんにねだっていた時だった――。
今思うと、せっかく買って貰ったというのに、数回友人と釣りに行ったくらいで、あれっきり全くやっていない。
父親も釣りなんてやらなかったから、買ってもらえなくてふて腐れ、爺ちゃんならと頼みに行ったのだった。

爺ちゃんは、“友人と新しい事に挑戦してみたい”という俺の好奇心を応援したかったんだと、今になって思う。すぐに、一緒に釣り道具屋に行って、一式買ってくれたのだった。もちろん、その事を知った母親は、すぐさま爺ちゃんにお礼と詫びの電話を入れ、俺はこっぴどく怒られたのだった。

どうして、母親というのは爺ちゃんや婆ちゃんが孫にお小遣いを渡すと、子供を怒るのであろうか――。俺だけではないと思うが、爺ちゃんや婆ちゃんが好意でくれたお小遣いを貰って、母親に「どうしてそんなの貰ったの！」と怒られた記憶はないであろうか。
だから、大人の見ていないところでこっそりと何かをする子供の様に、決まって「お母さんには内緒じゃぞ？ほれ、おこずかいじゃ」なんて言って爺ちゃん達が孫に渡すようになり、何故だか隠密行動をしているようで、子供ながらにドキドキしながら母親に内緒にし

ていたものである。
子供でも、大人でも、多分。『内緒のこと』というのはドキドキと胸踊る何かがあるに違いない。そう言ってお小遣いをくれる爺ちゃんも、同じ気持ちだったのだろうか。いつも、嬉しそうだったのをよく覚えている――。

話はそれてしまったが、爺ちゃんは人生相談なんかもよく近所の主婦や友人などからもよく受け、明確にびしっと結論を言い渡すのでよく頼りにされていた。大体が、『悩んでいるくらいならすぐに――』と言って促していたので、　あとで爺ちゃんから聞くと、いつも、『何故悩むことがある？　とわしゃ不思議なんじゃよ』と言っていた。思ったことをすぐやってのけてしまう爺ちゃんは、俺の中でかっこいい存在であった。
俺は、爺ちゃんみたいになりたいと子供の頃からよくそう思っていた――。

俺も――、今じいちゃんに相談したらどう答えるだろう……。

――博之っ、すぐに換気口を調べるのじゃ。気になることはすぐにやるんじゃ。

とでも言うかな。はは。
俺はため息を吐いた。
すぐに漫画を閉じ、パンツを上にあげ、ズボンをあげ、ファスナーをあげる。

「ふぅー……よしっ」

一度、俺は息を吐き気合を入れ、バンっとトイレの便座を少々乱暴に閉めた。

そして、睨む先はもちろん、その換気口である――。

俺のプライベートブースを荒らす者は、誰であっても許さない……！

俺、やるよ。爺ちゃん！

――そう、俺は決意をしたのであった。

第二章へつづく。

第二章【 言葉。】

――あの日は結局、俺は何も発見する事が出来ないままその日を終えた。
トイレの便座の蓋の上に登り換気口を外し、懐中電灯を照らしながら調べては見たのだが、とくに何かがいる気配がなかったのである。どうやら気のせいのようだ――と、そういう都合のいい解釈をしたのだ。

我ながら悩みすぎて精神的に来ているのかもしれないと思い、寝るには少し早い時間ではあったのだが、ベッドに入り込むとそのまま寝てしまったのであった。

すると俺はその日、爺ちゃんが出てくる夢を観た――……

――じいちゃん、俺、トイレに行ったら変な声がきこえてねっ？変なやつなんだ。俺に話しかけてきて、でも誰もいないんだっ

何故か俺は小学生の子供の様な声と口調で、そう言っていた――。
夢の中で、俺は子供の頃の姿で存在していたのである。
今は改築されて綺麗だが、古い歴史を感じる改築前の爺ちゃん家の縁側で、俺は今日起きたあの不可思議な出来事を、爺ちゃんに相談していたのだ。
夢というのは――、潜在意識が一日のあった出来事の中で印象に残ったものを、自分の都合がいいように整理して観せることがあるとも言うが、まさにそんな夢だった。――俺は爺ちゃんに相談したかったのかもしれない……。

……というより、面接に行ったりコンビニに行く――、飯を食う

――、漫画を読む――、という俺のあまり変化がなく人と交流の無い日常で印象に残る事などなく、今回の一件は唯一大きな変化であり、夢にとって珍しくスクープとして大きく潜在意識の中に取り込まれたのかもしれない――。

もっとも、変化がないという現状は会社にちゃんと勤めている時でも同じであった。

会社と家、飯屋の往復といった感じであまり変化のない悲しい現実を、潜在意識はつまらないヤツと思っていたに違いない――。

それはさておき夢の続きはというと、そう言った俺に向かって爺ちゃんは微笑んで答えた。

……変な声～？　はーはっはっ……博之。

きっとな、それは“神様”みたいなもんじゃよ……。“神様”。

おまえにビシッと、気合を入れてくれてるんじゃよ。キアイじゃ――博之。

……わかるかの？

俺は確かに自分が爺ちゃんに質問をしたという認識はあるのだが、いつの間にか視点は変わり、何故か俺自身と爺ちゃんが話しているその姿を何処か端から見ていた――。

そして、俺は爺ちゃんのその言葉に怪訝そうな表情を浮かべていた。

俺のそんな表情に、少し微笑んだ爺ちゃんはゆっくりと空を仰ぐように遠い目をしていた。

爺ちゃんにつられたのか、俺も天気が良く青く澄み切った遠いその空を不思議そうに見上げていた。

爺ちゃんはさらに続けた――。

……博之？　お前にとって、今大切なことは――何じゃと思う……？

――え……？

……お前にとって大切なこと、それはな――

――うん、何？

……。

――え……？　爺ちゃん……！？　聞こえないよっ

――……

という夢だった――。

何故こんな夢を観たのかは正直わからないが、気になるのは肝心の爺ちゃんの最後の言葉である。

しかし、何を言ったのか、そこまでは聞こえなかったのである。少し聞こえた気もするのだが、覚えていない。

爺ちゃんと俺は縁側でアイスを食べていた。

目覚めた時よくそうやって小学生の頃、爺ちゃんと縁側で話していたことが懐かしかったのか、今俺はアイスを食べている――。

『俺に、大切なこと』――。

『神様』――。

……って、待て。大体、神様って何なんだよ、爺ちゃん。

しかも。

漫画なんか読んで人の話を聞いていないあんなヤツが、『神様』

であるという可能性は限りなく低い――と、俺はそう思った。
はは……。
俺、最近パソコンで変なの見すぎかなあ……非現実的じゃないか。
俺は頭をくしゃくしゃに掻き毟ると、トイレに立ったのであった。
……あれ？　朝、俺……ふた閉めた気がするんだけどなぁ――。
――そう思った時であった。

「よ、来たか。相変わらずしけた顔してるな。いいから、ココ、座りっっ。」

「――う……。う、うわぁぁぁぁあっっっ！！」
ビタンッ！！
俺はトイレのドアを開けようとしたまま、ドアノブを掴んでいたのだが驚愕のあまり、自分が爆発による衝撃を受けたかの様な物凄い速さで後退しては、後ろの壁に身体を打ちつけてしまった。
その後はというと、心臓は重低音が規則的に鼓動を激しく刻み、その音は大音量で自分の中に響いて鳴り止まず――。そのまま固まって動けないまま額には冷や汗――。かと思うと、身体の力は抜け――壁に背中をつけたまま床にゆっくりとずり落ちて座り込んでいってしまっていた。

――で、でででで……出た……！！！！！

やっぱり疲れているのでも何でもない。夢でも妄想でも何でもない……！

紛れもなく『現実』に起こっている出来事であると、俺はそう確信した――。

「……お前さんいい反応してんな～ちょっと笑ってまいそうになるやん。そやかて、そんな驚かなくてもええやろ？　俺かて、好きでこんな見た目しとるわけやないもん」

そう愚痴を溢す様に声は言った。

俺は固まったまま奇怪な表情を浮かべ、逃げ出したい気持ちを抑え、冷静に脳裏にその思考を巡らせていた。

――こ、『こんな見た目』というのはどういうことであろう……。ていうか……、ど、どこにいるんだ？　やっぱり姿は見当たらないし――。

とすると、やっぱ上か……？

トイレの天井を恐る恐る見上げてみる俺を見て、声がついに腹を抱えて笑ってしまったかの様に、『もー勘弁してっひゃっははははっ、あーくるしっ……あーもうだめや』と、笑いを必死に抑え、落ち着いてからまた俺に語りかけて来た。

「……だーから、お前の目の前におるやろが。いつまで換気口眺めとん。全く笑かしてくれるわ。しゃーないなぁ、お前の目の前におるやろ？　それに、いつもわしの上にお前さん座って、よう用足しとるやろ？　それや、そ　れ」

「――は！？　……って、と、トトトト……トイレ！？！？」

あまりに不可思議なことを声が言うので、思わず俺は舌を噛みつつも驚きの返事をしていた。

そして、頭の中では新しい情報を整理するためにフル活動で分析が進んでいく――。

――い、いやぁ。最近のトイレの便座というのは、音声機能付なのだなぁ。
うん。い、今時のトイレは進化したんだ――よくやったなぁ“ＴＯＯＴＯＯ”も。
……それは、便座にさり気なく付いているそのアルファベットの文字を見て思いついたことであった。

『流します』
『便座が開きます』
『洗います』
――なんて事を音声でお知らせするための機能なんだ――、はは……。
カ、カーナビだって関西弁とか色々あるって言うしなぁー。……うちのトイレは今まで知らなかったが、そういう高機能を兼ね備えたトイレなんだな。うん、そうだ。

そもそも俺のマンションの古さから言って、もちろんウォシュレット付のトイレではない事など承知の上であったが、段々面白くなってきていた俺は、更に考察を進めていく。
自分が既に暴走している事も百も承知の上だが、もう誰も止めないでくれ。
人間が混乱した時に考える事などというのは、こんなものだ――。と、俺は思う。

音声機能といえば――。
きっと終いには『本日の量は６００ｍｌです』だとか……。
『本日は３００ｇです』――だなんていらない機能もそのうち開発されたりして……。
――いやいや……はっきり言ってそんなの必要ない。

せいぜい尿検査が出来るという便利さ程度にしてくれ……。

……俺の思考はどんどんと非現実的な世界へとその矛先が向いていき、よく考えてみたら、音声付なら決まった言語を話す程度で“会話なんて出来る筈がない”という事に、しばらく気付かずに迷走していた俺は、どうやら相当、現実逃避していたらしい。

例のトイレのおっさんの次の声の一言で、ついに俺は現実に戻された――。

「お前さん最近、よう悩んどるやろ。元気づけてやろうかと思ってな」

「！」

驚いている俺に、ため息を吐いてさらにトイレは続けた。

「悩むのはしゃーない事やと思うんやけどな？　就職も決まらん？　彼女もおらん？　友達も全然来ないからようしらんけど？　あんま電話とかしてる気配もないやろ？」

そう声がそこまで言った所で、俺はついにかっとなり「うるさい！」と反論していた。

しかし、それにも全く動じずに声は呆れた様に続けたのだ。

「――おまけにな。最近、『芳香剤』置かなくなったやろ？　あれ何なん。節約なん？　そんな金もないんかっ。芳香剤買わんなんて、節約したらいかんところやない！？」

「……」

……妙に突然話の流れが生活観の溢れる話になり、少し間の抜けた時間がそこに流れたため、俺はなんとかその現実の世界の地に足をつけ、しっかりと立ち上がる事が出来た。

その場から立ち上がった俺は、トイレの前にしゃがみこんで中を覗いてみる。
しかし、何もいる気配はない――。
考え直しても、確かにこのトイレの中から声は聞こえて来ていたという不思議な現象に、首を傾げていた。

『芳香剤』――。
これは特にあってもなくても良い物として、俺の中では位置づけされていた。
理由はその用途と実用性にある。
女性にとっては必要性を感じるものであるのかもしれないが、彼女もいない、友達の来訪もないという俺にとって必要のない物なのである。
誰も家に足を踏み入れる事さえなければ、ニオイを気にする必要性はない――。
それなのにその液体というのは、気がつけば空気で蒸発し空になってしまい、また買いに行かねばならない――。再就職も決まっておらず生活費は必要最低限に押さえておきたい俺にとって、絶対買わずとも生きていける生活用品のひとつというものであった。

「……芳香剤」
声は、一言だけ俺の顔色を伺うかの様に、再び口を開いた。

「う……うるさい。その辺は節約でいいんだ別に。男だし、なくてもいい物なんだっ」
自分の悲しい現状を並べ立てられた事に腹が立っていた俺は、開き直る様にそう言った後、少し哀しくもなった。
しかも、気がつけばついまともに会話をし始めてしまっていた事にも落胆した。
――正直、俺はあまり面倒なことには首を突っ込みたくないタイ

プだが、これは、自分の管理下である家の問題である。こともあろうか、トイレは芳香剤をちゃんと買って欲しいらしく一言だけ不機嫌そうに返してきた。

「――ケチ。」

そしてこの一言のおかげで、俺は何故か可笑しくなってきて笑っていた。

――最近、就職探し中のため面接や買出しに行く以外は外に出歩く事も減り、誰かと話したりすることがなかった俺は、こんな風に笑うと言えばテレビでお笑い番組を観ている時くらいであった。

『笑い事じゃないんやで。買うてくれへんならもう知らへん。もうええ。お前なんか知らへんぞ。ほんまに知らへんわー』

と、その後すねたようにトイレは言い始め、つい気がつけば俺はその手にコンビニの袋を下げ、自分のマンションまで４分程の距離にあるそこからの帰り道を歩いている――。

もちろん、その袋の中にあるのは芳香剤である――。

トイレのその余りに子供染みたすね具合に、何だかやれやれといった感じで呆れた俺は、仕方がなくコンビニまでひとっ走りして買って来てやる事にしたのだった。

それが馬鹿馬鹿しい行動だという事は、俺自身が一番わかっている事である。

不可思議なその声の要望に応えてトイレの芳香剤を買っている俺は、再就職も決まっていないというのに何をやってるんだろうなと自分に呆れてため息をひとつ吐いて、マンションのエレベーターに

乗り込んだ。

俺のマンションは6階建てで、築25年という古さでありながらも、結構どうでもいい場所がリフォームされている――。どうせなら、室内のリフォームをして欲しいものなのだが、俺が今乗っているこのエレベーターだとかロビーだとか――、半年前程前に改装工事が行われ新しく近代的に綺麗になったばかりだ　――。

外見を取り繕っても室内は相変わらずボロイままでは、何の意味があるのであろうかと大家に尋ねたいところである――。

ただ、家賃が安く、バス・トイレ別ということだけは気に入っていた。

俺はエレベーターを降り、4階の自分の部屋に入るなり真っ直ぐにトイレに向かった。

なんとなくコイツに用を足すのが複雑な気持ちになった俺は、コンビニで先程用は足してきたのであるが、まるでずっと我慢していたかの様に走り急ぎトイレに向かい、誰もいないその空間に向かって少しためらいながらも口を開いたのだった。

「ほっ……ほら。か、買って来たぞ芳香剤。これでいいか？」

俺はまたアイツが何も返してこないんじゃないかと少し不安も感じていた。

しかし、その声はすぐに歓喜してはしゃぎだした。

「おおお！　お前早かったなぁ、しかもっ、ラベンダーの香りやないかぁっ。ええなぁ～。よく、わしの好きな香りがわかったなぁ～～はよ、設置しいや～いや～久しぶりやて。わくわくしてまうわーあーまだかな～。あの芳醇な香り。ええセンスしとるわー」

何故かトイレはラベンダーの香りが好きだったらしく、嬉しそうな調子で俺を促した。俺は芳香剤を置こうとして、窓の下についている棚の上を眺めたところ、しばらく掃除もしていなかったせいか

埃が被っていたのに気付き、トイレットペーパーで少し拭いた。
その後設置した芳香剤からは、久しぶりに嗅ぐラベンダー“風”の香りは爽やかに狭い空間に漂ってくきた。
満足気に顔があれば頷いている調子で、しばらく恍惚とした声を漏らしていたトイレは、気が済んだらしく口を開いた。
「あーこれでしばらく運気もあがるってもんや～」

「あ、あぁ……そうか。よかったなぁー……」
俺は冷めた表情と感情の込もっていない言葉を声に言った。

そもそも、トイレのくせに芳香剤を気にするという事自体に呆れ始めていた。
人間が香水をつけ歩く様な感覚なのであろうか――――。

――しかし、コイツは『トイレ。』である。

俺は正直呆れ始めていた。
その後も、トイレは俺に掃除をさせたり、どうでもいいことをベラベラと喋ってきたり、とにかくこき使われてしまった。

トイレは、何者なのだと聞いても「知らん。」という。
それとトイレはトイレなんやから仕方ないと言っていた。
「いや、トイレはトイレなんだけど会話したりする事自体がおかしい」と聞いても、同じ返事を返してきただけであった。

とにかく、そんなトイレと俺のこの姿は、はっきり言って誰にも見られたくない――。

誰も目の前にはいないというのに、ひとりでぶつぶつと喋っている人というのを、街で見かけることがあるが、それが外ではないだ

けで自分もあまり変わりないであろうと俺は思った。
とはいえ、俺はその存在自体はおかしいと信じて止まないのだが、それを誰かに相談するわけにもいかず、しかしコイツとの会話が少し楽しくなってきているのを感じていた。

俺は観たいテレビがあったため、しばらくしてトイレを後にすることにした。

「じゃ、またな――」
「ほい、さいなら」

これである。
そもそも、このやりとり自体、おかしな話である――。
俺は少し苦笑しながらも、居間へ向かいトイレを後にした。

しかし、その日寝る前、俺は少しだけ思ったことがある。

『お前さん、最近よう悩んどるやろ。元気付けてやろうかと思ってな――』

アイツがそう言っていたのを思い出したのだ。
確かに、本当にアイツは俺を元気付けるために現れた様な気がしていたのだった。
何故、あいつが俺の元に現れたのかはわからない。
……いや、このマンションは築２５年というのだから、２５年前から存在していたのだろう。

『神様みたいなもんじゃよ、神様』

と、夢の中で言った爺ちゃんの言葉も思い出した。
確かに、爺ちゃんが言ってたようにアイツは、２５年間、ただ黙ってずっとそこに代わる代わる住む者がトイレで用を足す姿を見守ってきたのかもしれない。
その古いトイレから聞こえてきた声は、ひょっとしたら――神様の様な存在なのかもしれないな……と。

ひとまず俺は、そう――結論を出したのであった。

今日一日こき使われ疲れてはいたものの、子供の時の遠足の前の日の夜のようにベッドの中で微笑んで、俺は眠りについていた――。

第三章【大切なこと。】へ続く。

第三章【　たいせつなこと。】（前書き）

はい。短編なので三つの話で終わりです。

第三章【　たいせつなこと。】

――朝起きて、俺は歯を磨く。
顔を洗う。
トイレに行く。
この三つの動作を欠かさずしていた。勿論それは当たり前の日課である。
この三つの動作の内、前者の二つをしない奴というのは、不潔であろう。
どうでもいいが俺の友人に本木という奴がいるが、本木がそれに当たる。
しかし今の俺はそれには当たらないものの、その三つ目の用途だけはどうしても出来ない。何故ならトイレに神様がいるからだ――というのは、すでにこの話を知っているそっちの世界の人たちならば、俺の今のこの気持ちを理解してくれるだろう。
俺は走る。
我慢も限界に近いこの『尿意』という人間に欠かさずやって来る自然現象を、何が哀しくて自宅で済まさずにコンビニまで走っているのか……。
馬鹿馬鹿しくもあるが仕方はないのだ。
「――あぁ～あ、すっきりしたなぁ……」
とそう呟いた俺の目の前に飛び込んできたポスターの一枚。

――ノベって見ないか――
第１４回　ノベル大賞
ジャンル問わず。述べよ！　ノベよ！

……。
俺は正直このセンスのなさに絶句した。

しかし――、賞金は……さ、三百万……ッッ！？
すげぇ……。
とはいえやはり……センスねぇ……ダジャレじゃねぇか……。
ノベル……、小説……、三百万……。そして、“述べよ”――。
あぁ、この最後の一言はどうでもいいのに、何故つい読んでしまったんだ。
消えろ、あっち行け。

「はぁ……」
俺は息を吐くとコンビニのトイレを後にした。
そして、何の因果か俺はトイレの洗剤を購入していた。
毎日毎日コンビニのトイレをよく借りに来るというのは、少々肩身が狭い。
何か買っていかなければ申し訳ない気持ちになっていた。
つい、余計な物を買ってしまう。
昨日は“トイレその後……”という消臭スプレー。
一昨日は“雑巾”。
三日前は、……なんだっけ、忘れたがどれも掃除用品ばかりである。
おっといけない。週刊マガ人を買っていかなければ。
俺は買い忘れたその漫画雑誌を買うと部屋へと戻った。
家に帰ったが、とくにこれといってすることはない。
ネットで検索窓を出す。

［　―　　】【↓】

ここに俺は何を思ったか、気がつけば文字を入力していた――。

［　述べよ！　ノベよ！―　］【↓】

「ぷっ……あっははは、やっぱりおかしいって。こんなの検索で出て来るのか？」

俺は少々馬鹿にしながらも、マウスで検索ボタンをクリックしていた。

ポチッ……

ん！？

おい、ちゃんと出てくるな……。

しかも、結構しっかりしてる。

……センスはないのに。

「――やると思った時がやり時なんじゃよ、博之……」

「！」

俺は辺りをキョロキョロと見回した。

爺ちゃんの声がはっきりと聞こえた気がした。

俺の心の中の声が、頭の中で響いただけ――なのだろうか？

あ……れ？　今の爺ちゃんが……言った言葉だった気がするんだが……。

いつ言ったんだっけ。

そうか！　夢だ――夢の中で爺ちゃんが俺に言った事だ！

たいせつなこと、やろうと思った時がやり時――似た様なことを爺ちゃんはいつも言っていたじゃないか。

俺はその昔――。
中学の頃だ。
友達との間で何故か『エリート商社マン』という言葉が大流行を博していた。
それに『ごっこ』という単語をつけたその遊びは、今思うと馬鹿らしいがノリに乗って大流行していたのだが、それはどんなものかというとクラスの女子と一緒に『今日は会議があるから、いつもの場所で待っていてくれないか。ベンツで迎えに行くから……ふっ』『きゃぁエリート様、素敵ぃ』という、本当にくだらない遊びである。
しかし、それをしていて付き合った奴らがいるのだから信じられない話である。

それはともかくとして、その遊びが流行っている中で現代文の初老の教師、塚本先生が『全中学校文芸コンクール』なるコンクールの応募を呼びかけていた。
俺は、安本という奴と一緒に共同制作で小説を締め切り二日前に書き始め、ちゃんと期限までに書き上げ応募したところ、入賞作品として文集に載ったことがある。
そのタイトルが今思うと何故それが載ってしまったのかは不明なのだが、『めざせ！　エリート商社マン！』という何ともふざけたタイトルである。
俺はそれに凄く感動したことを覚えている。
おまけにクラスで流行っていた『エリート商社マン』という題材で見事成功を収めたという功績は、一躍有名人である。
俺はそれで小説を書くことに目覚め、楽しくなりたくさん書いていた。

――しかし、それは高校に入ってからは変わった。

付き合いのある友達、バイト、金銭的にも格差が上がった俺は、学校帰りに友達とカラオケやゲーセンに行ったりしてよく遊ぶようになり、小説への興味が薄れていった。
安本とは久しぶりに会ったことがあるが、安本は小説の話を昔と同じ様にして来た。
しかし俺は興味も薄れていたので、そっけなく返事をしてしまい、だんだんと疎遠になっていった。
でも、高校の時の友人との遊びは付き合いのためであった気がする。

学生時代は、群れることを割と好んでいたと思うのは俺だけであろうか。
群れから外れるのが怖い――。
これは今だから思う事だ。

個人としての価値も見出せずに、そうやって人の目ばかり気にしていた頃もあったと思ってやまないのだ。

それに本当に小説から興味が薄れていたわけではなかった。
俺は時間がなかった――。高校時代は遊び、付き合いに忙しく、社会人時代は仕事に終われ、残業もあり、飲んで帰って寝るだけ。休みの日はぼーっとしていたい。
その連鎖に見事にハマっていた気がする。

人生の休息時間――というのはよく言ったものである。

俺は今、それを与えられているのかもしれない。
勿論、きちんと就職は探している。
しかし、俺は爺ちゃんの言葉通り、少しあのポスターを馬鹿にしながらも興味を持っていた。

応募――してみようと、その時俺は思ったのである。
俺はトイレのドアを開けた。
真っ直ぐに鋭くトイレを見ていた。
しん、と静まり返るトイレに俺は言った。

「俺、お前の言いたいことが少しわかった。俺、やりたいことあった。どこまでやれるかわからないけど、俺自身が納得できるようにやってみる……」

俺は返事も聞かずにトイレのドアを閉めた――。
小説を書き始めて一ヶ月経っただろうか。
締め切りぎりぎりに間に合って、俺は無事期限内に応募することが出来た。
そして、その間に就職も決まった。
前と同じ職種であるが、なかなか給料も悪くない。
輝かしい社会人復帰だ――。
と思った頃に、俺はまた爺ちゃんの夢を見た。

『博之――お前もようやく、わしに近づいて来たかのぉ……』

――爺ちゃん。俺は、爺ちゃんが何故そうして来たのか、わかった気がするよ。

『そうかそうか……立派になったのぉ。その目じゃ、その目――お前は最近目が開いているのか開いていないのか、ぼーっとしていては何も見えんじゃろうと思って様子見に来たんじゃよ』

――え？　どういうこと……？

『ふぉっふぉっふぉっ、博之――たいせつなことというのは、わし

が言うべきことではないんじゃ。自分で思う事、それがたいせつなことなんじゃ』

――やりたいと……思うこと？

『そう、せっかくのその意欲を何故諦めるんじゃろうなぁとわしは思う……お前はもう、大丈夫じゃなぁ……』

――え？　爺ちゃん待ってよっ……俺っ

『――……』

――小説に応募してみたんだっ、爺ちゃんっ！

じっ……――

「――爺ちゃん！！」

ガバっと俺は起き上がって叫んでいた。
雀が鳴く声がしたと同時に、俺は更に驚いた。
物凄い爆音を響かせて金属音を奏でる目覚まし時計の音。
カチッとそれを止めると、俺は日課を行う。
そういえば、最近あいつと話をしていない――。
就職が決まる前はずっと小説を書いていて、決まってからも少しの間は小説を書くのに夢中で、仕事に復帰し始めてからは帰ったらすぐ寝たり、相変わらずトイレもコンビニで済ませていた。
俺はトイレをガチャっと開けた。
「よぉ……。最近話していなかったが、元気か？」
しぃ……ん。
静まり返っているトイレの空間。

「ん？」
トイレの芳香剤が切れて空になっている。
俺は息を吐いて、拗ねているのかと呆れた。
「――今日、帰りに買って来てやるから。そう拗ねるな。じゃ、また夜な」
俺はトイレのドアを閉めて、急いで準備をして会社に向かった。

――そして、帰り道。
コンビニに寄り、トイレを済ましてアイツが好きなラベンダーの香りの芳香剤をカゴに入れ、どうでもいいことだが最近入ったバイトの『椎名』さんと名札に書かれた可愛い癒しの女の子に微笑んで会計をしてお釣りを受け取り、マンションへと向かったのだった。

しかし――。
異変はそこからだった。

「おいっ、何で返事しないんだよッッ……！　おいってば！！」

俺はトイレの便座に向かって声を荒げていた。
いくら話しかけても何も言わない――。
ひょっとしたら、もういないのかもしれない――。
そうとは思ってはいたが、俺は会社から帰ったその背広のままの姿で、トイレの前の床にしゃがみ込んで穏やかに口を開いていた――。

「――俺さ……、自分でも信じられないんだけど……、あれ大賞取ったんだぜ？」
しぃ……ん。

「爺ちゃんとお前の言っていたことが、わかった気がするんだ。俺にたいせつなのは、先が見えないことへの不安じゃなくて、挑む勇気を失いかけていたってことに……」

「――でさ、何を題材にしたと思う……？　俺とお前とのこの有り得ない状況のことや、昔の事、爺ちゃんとのこと……それをさ、そのまま題材にして結末は勝手に考えたつもりだったんだけど――小説と同じになっちまったなぁ……」

相変わらずしぃんと静まり返ったトイレの室内で、俺はふっと呆れた様に微笑んだ。

トイレという空間は、白くて――。汚くて――。狭くて――。というものであるが、俺のトイレは少し違っていたんだと俺は続けた。白くて、おっさんで、ラベンダーの芳香剤が好きで、言葉は乱暴だが、俺に大切な事を教えてくれた――。

そこまで言った俺は、深くため息を吐くと立ち上がって、その不思議な現象の起こったトイレに向かって言った。

「――ありがとな……」

と――。

一瞬、聞こえた気がした……。

満足そうに笑うその声が――……

おわり。

第三章【　たいせつなこと。】（後書き）

友人と「トイレ」というテーマで小説を書こうと言われて何故か書くことになり手をつけていましたが、短編だと言うのに長編の方を先に書いていたので、長編が完結したのでやっと全部書き終えました。

「トイレ。」

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n2936l/

トイレ。

2010年10月8日23時14分発行